

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 72

2015 年 5 月

Special to the Newsletter

私の日本人移民史研究 ―天理とのかかわり―

飯田 耕二郎

私はこの3月で大阪商業大学を定年退職した。同志社女子中高時代を含めると41年の教員生活を送ったことになる。私が教員生活を始める前、つまり学生時代から開拓地や移住地に関心があり、最初フィリピンのミンダナオ島ダバオに渡った日本人移民を調べに2度現地に出かけたことがある。そして同志社女子中高に就職した1年目の夏に私の兄がカナダのオタワにいたので、夏休みにバンクーバーからバスで大陸横断して訪ねていった。そこからカナダやアメリカなど北米大陸に渡航した移民に興味移っていった。現在の主たる研究対象の地であるハワイはどちらかというアメリカの辺境地の感じで日本の沖縄と同様のイメージ（偏見）を持っていて、当初はあまり興味がなかった。

ハワイを研究対象とした経緯

アメリカのカリフォルニア州の日本人移民のことなどについて資料を集め、その延長でテキサスの日本人による米作について調べていた時に、たまたま外務省通商局の『移民調査報告』という資料に、初期の米作者で同志社社長であった西原清東や日本の労働運動の創始者の1人である片山潜などと共に、星名謙一郎という名前を見つけた。その珍しい姓のために、同志社女学校の創始者の新島八重や有名なデントン先生の世話をした星名ヒサの夫で元同志社大学の学長であった星名秦の父親であることが分った。同志社に関係があるということもあり、西原清東とともに彼について調べていくうちに、彼はテキサスのみならずハワイへのキリスト教伝道から始まり、最後はブラジルで暗殺されたということを知って彼について非常な興味を抱いた。今から30年以上も前のことである。

ちょうどその頃、同志社大学人文科学研究所で「海外移民および海外伝道に関する研究」班が発足し、私はこれに参加することにした。そこで星名に連なるハワイのキリスト教の伝道者について調べ始めたのが、ハワイとのかかわりの最初である。2年前のNHK大河ドラ

マ「八重の桜」で初期の同志社卒業生で熊本バンドの人達が登場するが、彼らに続いて神学部を卒業した連中が国内だけでなく海外とくにハワイへ日本人移民にキリスト教を伝えるために出かけて行った。彼らについて調査するために1986年に3カ月間の休暇をもらってカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に行った後、ハワイに向かいハワイ大学や日系キリスト教会で史料蒐集にあたった。

その後、ハワイの日系人社会の変遷について興味がわき、本来の専攻分野である地理学の立場から考察しようと思うようになった。1995年からは大阪商業大学に職を得て、2000年に海外研究員制度によりハワイ大学の客員研究員として家族と共に1年間滞在した。そして2003年には、大学の出版助成金を利用してこれまで書いた論文をまとめる形でナカニシヤ出版から『ハワイ日系人の歴史地理』という本を出版した。この本はハワイ諸島全体の日系人について書いたもので、中心都市ホノルルについてはほとんど触れていなかった。そのことが気になり、大学の紀要にホノルルに関するレポートをその後掲載し、それらを集めて2013年に再び出版助成金をもらって同じナカニシヤ出版から『ホノルル日系人の歴史地理』という本を出すことができた。現在は自分の研究のきっかけとなった星名謙一郎の生涯をまとめる作業を行っている。ブラジルにもこれまで8回ほど行ったのでブラジルの日系人の歴史もできたら書きたいと思っている。

日系ブラジル人移民の研究

先にも述べた星名という人物が私のハワイ・テキサス・ブラジルを調べるきっかけになったが、彼はハワイやブラジルで日本人移民の草創期の頃に新聞を発行した。とくにブラジルでは南米最初の日本語新聞である週刊の『南米』を1916年の初頭から発刊するが、その新聞を鹿野久市郎という人物が手伝っていた。しかし彼等は金銭の絡むトラブルで取っ組み合いの喧嘩をして別れてしまった。鹿野は帰国後ブラジルに関する記事を『植民』や『海外』などの雑誌に掲載しているが、そのうち『海外』の1928年2月号で「ブラジル実生活礼賛」という記事のなかに彼についての紹介文がみられる。曰く「鹿野氏は南米にあること八年、親しく鋤鋤をとってその土に親しめる土、目下は奈良天理外国語学校講師、大阪府嘱託講師、大阪外国語学校講師としてブラジル語、伊太利語の教鞭をとって居られる」とある。山倉明弘先生が本ニューズレターの前号で書かれたように天理大学の前身である天理外国語学校が1925年に設立されたが、『天理大学五十年誌』をひもとくと昭和3(1928)年4月10日現在の「職員調」の中に鹿野久市郎の名前が出ており、「受持学科」葡萄牙語、「就職年月」大正15(1926)年4月、「年齢」41、とみえる。インターネットで検索してみると『変わり学読本』(1936年発行)という本で、彼は「灯籠考証」という文章を著し、「東京外語出身、天理外語教授、刀剣研究家として知らる」と出てくる。彼は天理外語の最初のポルトガル語教師であったようだが、とくに帰国後については今のところこのような

断片的なことしか知り得ない。この場を借りて彼について何らかの情報をお持ちの方は教えていただきたいと思う。

さて私はブラジルには、1998年のブラジル移民90周年の式典の際に初めて訪れた。その後、科学研究費をもらってブラジル移民について本格的に研究しようと思い立った。今はもうやっていないが当時、勤務校の大阪商業大学でポルトガル語の授業が行われており、ちょうど私の空き時間であったのでその授業に1年間出席させてもらった。講師は天理から来られていた石川清雄先生であった。履修生は2、3人であったため、大変親しくさせていただいた。先生は確かサンパウロ州内陸のバウルーのご出身で、天理では翻訳の仕事をしておられたと記憶している。教えてもらったポルトガル語は今ではあいさつ程度の言葉しか知らないが、しぐさで指を丸めるのはよくないとか、親指をたてるのはグッドなど今でも覚えている。一度、先生のお招きで天理大学を訪問し、吉岡黎明先生や矢持善和先生にもお会いすることができた。

2008年のブラジル移民100周年の記念式典にも参加したが、その式典プログラムの第一部のテーマが「芸能」で、ラジオ体操のデモンストレーションから始まり、沖縄太鼓、和太鼓、ソーラン節など日本でも今流行の芸能団体が繰り出してきた。その後、新宗教団体のパレードが続いたが、その中に天理鼓笛隊もあった。ブラジルから帰ってから大阪商業大学の比較地域研究所から発行している『Milepost』という機関誌に式典に参加した際のエッセイを執筆する際、自分の撮った写真はあまり写りが良くないため、たまたま知人からもらった『天理時報』に掲載されていた「天理ブラジル団鼓笛隊のパレード」の写真が鮮明で会場の雰囲気がよく伝わるものだったので、これを使わせていただくことにし、その許可を発行元である天理教道友社に求めたところ写真の掲載を快く認めていただいた。

ハワイ「天理文庫」での資料収集

ハワイについては1986年にしばらく滞在した際、ハワイで一番古い日本人キリスト教会であるヌアヌ組合教会に入出入りしていた。この教会の関係者が宿泊するアパートで寝起きしたが、同じヌアヌ街にあって近くに天理文庫というのがあることを知り、行ってみると多数の日本語の本が所蔵されていることが分かり、そこで永くここにおられる中尾善宣氏にも初めてお会いした。2000年に家族とともにハワイに1年間滞在した際には妻と共に早速メンバーの登録をした。ちなみに私のメンバー・カードの番号は200番でキレイのいい数字である。登録をすれば何冊かを1か月ほど借り出すことができた。所蔵する日本語の書籍の冊数ではハワイで一番多いのではないと思われる。なかには日系人の歴史に関する珍しい本もみられる。日本語新聞も置いてあり、毎週ごとに新聞を購読しに行った。最新の新聞のほかに『イースト・ウェスト・ジャーナル』という新聞の復刻版もそろっていて、ハワイ大学のように面倒な手続きがないので、この新聞のコピーをたくさん撮り、それを

今でも結構貴重な資料として利用している。

ハワイにはその後も毎年のように訪れては天理文庫に通っている。場所はヌアヌ街を山の方向に行った町はずれの墓地のそばにあり、市バスの4番しか通っていかなくてやや不便ではあるが、ヌアヌ溪谷の静かな雰囲気の中ときどき鳥のさえずりや風の音が聞こえてきたりして、コーヒーをいただきながらの読書には最適の場所である。司書の方はその後、何人か変わられたようだが、4、5年前からは岡田法夫さんご夫妻がやっておられる。岡田さんはレスリングのコーチとして有名な方らしく、前任のコロンビアからハワイに来られたとのこと。大阪商業大学の姉妹校である中京女子大学（現・至学館大学）も女子のレスリングが有名なので話がよく合う。閉館日でも開けてもらったことがあった。

学会・研究会活動

移民に関する学会・研究会の関係では、1991年に始まった日本移民学会には創立当初から私は運営委員として参加し、最初は事務局次長、2005年からは2年間事務局長を勤めた。関西でも移民の研究会をやっており、マイグレーション研究会という名称で1年前まで私が会長を務めた。地理学や歴史学、社会学、文学、音楽や芸能など様々な分野の人が移民を対象に研究していて、けっこう面白くて刺激になる。年に5回、大体2か月おきに関西の大学の持ち回りで開催しているが、そのうち3月は合宿例会と称し、1泊で2日間にわたって行っている。2年前の2013年3月には研究会のメンバーである山倉先生などのお世話になり天理大学で開かせていただいた。1日目は同大学の山田政信先生による講演「天理教と海外伝道」で、私にとっては最も関心のあるテーマであり、パウルー市がブラジル伝道を始めた土地であることを知った。懇親会の後、芦津詰所に宿泊させてもらい朝食もそこでいただいた。そういえば今から20年ほど前にも日本移民学会のワークショップが天理大学で行われた際、慶応大学の柳田利夫先生の世話で海外から来られる方が利用する詰所に宿泊させてもらったことがあった。合宿2日目の午前中は天理参考館を学芸員の梅谷昭範氏の案内で、とくに「移民と伝道」のコーナーを中心に見て回った。ここには過去に何度か訪れたことがあり、空き缶で作られた楽器はいつ見ても印象的である。

以上のように私がこれまで日本人移民の研究をするなかで、天理といろいろな関係があったことが思い出された。考えてみれば天理教そのものが海外への移民と深くかかわってきたため、場所的にも近いこともあって、関わりができるのは当然のことであろう。私はこれまでその一端に触れただけで、天理教の海外伝道や移民はもっと奥深いものであるに違いない。

（大阪商業大学元教授）

文学の中のアメリカ生活誌 (63)

新井 正一郎

South Carolina (サウスカロライナ州) 1660年に亡命先のフランスから呼び戻され、王位についたチャールズ2世は気前のよい国王だった。彼はお気に入りの連中にアメリカ植民地の何百万エーカーの土地を惜しげもなく与える傾向があった。1663年、王政復古に際し多大な尽力をした8人の貴族たちに報償として、バージニアの境界からスペイン領フロリダのデートナビーチまでの広大な地を下付した。彼等はその地を英国王 Charles II「チャールズ2世」に因むラテン語名 Carolana から the Province of Carolina「カロライナ地方」と呼んだ。当初、彼等はこの地方へ送り込む人間の費用を公的負担で埋めることを避けるため、古き植民地バージニアの住人を送ろうとしたのである。カロライナの北部には、バージニア人がアルビマールという小さな集落を建設し、タバコやトウモロコシを栽培して暮らしていたからだ。だが集落から移住先のアルビマール湾までは遠かったので、期待した数のバージニア住民は集まらなかった。

その後、この植民地建設の権限を握ったアンソニー・アシュレー・クーパーは、資産家ジョン・コールトンと相談して、カリブ海のイギリス領バルバトス島や他の西インド諸島からの約200人の移住者をカロライナ地方に運ぶ行動にでた。しかし、植民地初代の総督は移住先がスペイン領セント・オーガスチンに近いことを恐れ、アシュレー川とクーパー川が流れ込む湾近くに新たな植民地チャールズタウン（当初チャールズ2世に因み、Charles Towne「チャールズ王の町」と2語に分ち書き記されていたが、独立戦争後の1783年に Charleston「チャールストン」と改称）を建てたが、長らく人口は少なく、イギリスへの輸出品も何一つなかった。そうしたなか生まれたのが、アシュレーが秘書の哲学者ジョン・ロックの手を借りて作成した「カロライナ基本憲法」という風変わりな法律である。これをもとにアシュレーは時代おくれの貴族的社会をつくる構想を抱いた。こうして、12,000エーカーの土地をもつ8人の貴族的身分の土地所有者と数千エーカーの土地を保有する荘園領主 (lands of manor)、首領 (caciques)、地方伯爵 (landgraves) という奇妙な称号を持つ貴族的な農園主が社会の上位に位置し、その下に白人労働者が、そして黒人奴隷という順で続く3層からなる階級社会が出現した。

貴族的領主たちはこの社会の仕組みに喜び、自分たちの下で働く人々を募集した。1680年代になると、チャールズタウンの良港、信教の自由を宣伝するパンフレットが誘因となり、イングランドの長老派、スコットランド人、フランスの新教徒など相当数の移住民がやってきた。特記すべきは、これらの住民に加え、プランテーション制度が確立していたバルバトス島からのイギリス移住民が連れてきた黒人奴隷がいたことだ。チャールズタウンの低地地方の奴隷労働力に依存する米生産が盛んになるにつれて、大プランターは豊かな生活の鍵である余暇、別荘、馬車などを持つにいたった。かくして1690年代までに貧しい田舎くさいこの地は、イギリスのどの町にも劣らぬ都会風の社会になった。ところが1680年代にチャールズタウンに移り住んだ人々は、土地獲得に対して意欲旺盛だったので、この町の社会の枠組みに強い不満を抱きだし、1719年に貴族的領主の寡頭支配に対して反抗を起し、国王にこの植民地を接収するように要望した。10年後カロライナ地方は南北に分けられ、それぞれが王領植民地になった。South Carolina という言葉ができたのは1788年だ。

17世紀の新世界で、ボストン、ニューヨークに次いで成長していたチャールストンは南部の商業、社交、文化の中心地だったが、その花形は政治家や農園主であった。チャールストンでは文人は本気で扱われなかった。古き南部のロマンス作家の中で最も偉大な作家と言われたチャールストン生まれのウィリアム・ギルモア・シムズ（1806～70）はますますつのるチャールストン市民に対する不満を次のように言う。「チャールストンは私のどの労作にも微笑みかけなかった」と。しかし、チャールストンの文学はすでに南北戦争のかなり前に、「アッシャー家の崩壊」（1839）など、人間の心奥にある怪奇恐怖を物語って読者の中産階級的感觉を驚かした天才エドガー・アラン・ポー（1809～1849）の「つむじ曲がり（perversity）」の文学において花咲いていた。旅役者の子としてボストンに生まれ、2歳の時に孤児になった彼は、南部の貴族ともいべき富裕なタバコ輸出商アラン養夫婦と共に少年期を詩人パイロン卿が活躍したロマン主義時代のイギリスで教育を受け、早くから騎士道的でロマンス的なものに魅了された。このことは生来の虚言癖とともに、自らの放浪と貧困の生涯に根強くからみついた神話を創造することになる。18歳の時、彼は養父との口論の末、リッチモンドの養父の家を飛び出し、厳しい現実の中で生きてゆくことになるが、殆ど収入がなかったため、たちまち最悪の貧窮の状態に陥った。彼が神話によって隠そうとしたのは、この時期（1826～1833）だ。たとえば、1827年6月末頃、騎士道に飢餓にも似たものを感じていた彼はギリシャの独立戦争に加わりトルコ人と戦って名をあげるべくアメリカを離れたが、この企てはフランスで事件に巻き込まれたせいで果せなかった、という芝居がかった話を誇らしげにした。このようにロマン主義的な自画像を強調していたが、実のところは生活の行きづまりから、志を得がたい野心的な青年が赴く世界であった軍隊に入ったのであった。

しかし、彼の貴族的渴望は消えなかった。歴とした入隊許可書にエドガー・A・ペリーという偽名だけでなく、職業牧師、年齢22歳、目灰色、髪の毛茶色、顔色白など、多くの虚偽記載をしているからだ。それはさておき同年（1827）の10月31日、彼は配属された部隊からチャールストン湾内のサリヴァン島ムールトリー砦に転勤させられた。彼はここに駐屯した時に小品『アル・アーラーフ、タマレーン、小詩数篇』（1829）を書いた。またロマンチックな景観に富むサリヴァン島を舞台とした作品としては、「黄金虫」（1843）という彼の本領の一つである推理（探偵）小説があげられる。チャールストンに住む「私」がサリヴァン島に知人ルグランを訪ねるところから始まるこの物語のテーマは、知の力による謎解読である。宝探しの伝説を信じるルグランは、羊皮紙にひそむ暗号解読に成功し、海賊が隠した宝を手に入れるのだが、彼を特徴づけるのは、発掘した宝よりも、その在り処を苦もなく解くに到った自らの偉大な頭脳の方に、「興奮」する理性的人間であることだ。ポーはまた芸術についての基本原理をのべた作品で「人間の独特な資質は理性だ」というが、その狙いはたえず恐れていた自らの魂の中にひそむ狂暴な情念を抑え込むことであった。そのことは彼のもう一つの本領の怪奇恐怖小説に明示されている。何人かの主人公は合理性と分析力によって、閉ざそうとする空間（渦巻く海、おとし穴、壁など）の中で経験する死への恐怖に押しつぶされず、生還する、あるいは帰還はできないが、わずかばかりの理性が残っていることで、破壊的にならず、しばし「幸福な安らぎ」感に包まれると述べられている。「メールシュトロームへの下降」（1841）、「黒猫」（1843）はその好例だ。

（天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長）

アメリカス学会第19回年次大会

記念講演1 (要旨)

“幸せを呼ぶ” グローカリズムの経営哲学

村山 元英

1. **グローバルの力学的概念**を、相対的な力関係に沿って定義すると次の通り。①アメリカ、ドル本位制、資本主義、キリスト教、アングロ・サクソン (アングロ・アメリカン)、民主主義 (人権尊重)、英語、先進工業国、②強い国、軍事大国、経済大国、世界の警察国家、異種混濁に苦悩、③標準的、規範的、世界的、地球規模、④合理化、定形化、画一化、数値化、目標化、モデル化、標準教科書化、⑤グローバル・リーダーシップをめざす、⑥問題認識は：所得の格差問題、金融資本主義、地球環境の破壊、中国の台頭と欧米諸国の衰退、持続性への危機管理、新興国の台頭 (BRICS など)、領土と資源確保、国家利益と国民感情、人権と差別問題。

2. **ローカル概念**は、多様性の中にも共通項があり、それをまとめる次のようになる。①伝承や慣習にこだわり、行動様式を差別化する、②自己防衛的な行為を優先し、内部要素を囲い込み、外部要因を排除する、③先行事例を重んじ、伝統的な行動で、既存組織の閉ざされた利益を求める、④外部要素を内部化し、依存から自律を求め、他を自己強化へと巻き込む、⑤新しい運動への定着している核文化資質からの抵抗。同時に、未来の変化への成長進化する種を期待している、⑥変わる文化と変わらない文化を区別、③文化変容の動態性が、その文化の起源に逆流し、起源を活性化させる (再帰性)、④変わらない文化が、変わらない構造の基本価値を維持し続ける。

3. **グローカル**とは、グローバルとローカルの両概念が融合する過程と領域である。グローカル概念を、経営学に取り込み経営人類学の構築を半世紀にわたり現場研究してきた。最

近では、グローカル経営が、ユダヤと日本の両企業文化の類似性をより色濃くしてきている。その類似性とは、①グローカル経営は文化が起源で、教育の方法でもある、②グローカルな「経営の本質」は変わらないが、グローカルな「経営の方法」は環境によって変わる、③地域知能のローカルな種がグローバルな花を咲かせる (隙間ビジネスか新産業に進化する/アメリカ系ユダヤ人ビジネスマンによる先端的情報産業起こしなど)、④「超越的な問題解決主義」である。

4. **グローカリズム経営哲学**とは、超越的な問題解決主義である。その実践過程は、創造的破壊への「当事者意識」で、“擦り合わせ”の「超える・未来の場 (ば) づくり」となる。その内容は、①対立矛盾の自己同一過程、②闘いと安らぎの営み、③混沌は美しい秩序、④異なる他者を自己内包化の4本柱で成り立っている。創造的破壊への“擦り合わせ”とは、当事者意識の「場 (ば) の理論」であり、その方法論としての実践哲学は、①中範囲の論理、②パラドクシカルを理解する、③超越的な問題解決志向、④場の真実に柔軟に対応し、人間と組織の自律性の回復をめざす。

5. 「**グローバル人材**」とは、**能力資源の意味であり、その能力の所有者は、“グローカル人間”である**。ユダヤと日本の両企業文化を比較して捉えなおすと、グローバルは能力世界で、グローカルは人間存在となり、両者を結び付けることに、ユダヤ系も日本系も価値を見出す。「グローバル人材」の既存用語を用いる研究者らが、経営の現地化、経営の中の人間と文化に光をあてると、「“グローカル”人材の概念」を“無意識に包含している。グローバル人材の資質が、グローカル人材と同じ意味になる要因には、経済合理性だけでは測れない歴史認識を超えて、生命への起源回帰の現実問題がある。

6. “グローバル人間”の型と心の特性をまとめると次のようになる。①自分が変われば既存組織が変わる（地方創生は自己創生への意欲から始まる）、②心身二元的一元の経営主体性、③「型はなりやすし。心はなりがたし」（市川猿翁の言葉）、④「創造は繰り返すことから生まれる」・「芸道は仕込むこと（身体化すること）」（十二世市川團十郎の言葉）、⑤型だけの表層的な「グローバル人材」もいる、⑥型に秘められた心があること（「グローカリズム哲学」を基層に持つ“グローバル人間像”）、⑦“未来の場”づくりへの変革の器である。

「“グローバル”経営」は、自国内での土着型近代化の論理、即ち、内発的発展の論理を海外移転させ、外国の先進性や後進性の区分なく、その国の内発的発展の論理との繋がりのある「“グローバル”経営」を現地化させることである。価値観の多様性が、歴史・起源・統合・収斂の戦略的組み合わせの妙を發揮する。

7. グローカリズム哲学を基礎とする“グローバル”理論は、現場力・実践主義のグローバル過程論である。報告者は、人間の原点でグローカリズムの学問を創る。前述のグローカリズムの定義には、報告者にとって下記の現場の真実がある。

①「対立矛盾の自己同一過程」は、ベトナム戦争中の現地研究から産まれた概念である。

②「闘いと安らぎの営み」は、戦後の日本経済を復活させた国家的企業の経営者との面接調査から集約された概念である。

③「混沌は美しい秩序」は、成田空港紛争の問題解決への現場での死生観からの覚悟である。

④「異なる他者を自己内包化」は、血が一つになる異種混合の未来の経営世界観を想定した“クリオール”文化の可能性である。（千葉大学名誉教授・シアトル大学特別招聘教授）

アメリカス学会第19回年次大会

記念講演2（要旨）

人の移動とことばの移動—借用語について考える

河野 彰

1979年4月に当時の大阪外国語大学にポルトガル語の専任講師として奉職してから2014年3月末で現在の大阪大学外国語学部を定年退職するまで、様々な研究テーマに取り組んできました。一見するとバラバラに見えるこれらのテーマもその底流にはひとつの研究上の関心がありますが、時間の関係もあり、ここでは詳述いたしません。年代順に現在までの研究テーマを列挙すると（1）動詞の意味論（言語理論をポルトガル語に当てはめる方法）（2）ポルトガル語（ポルトガル、ブラジル両者のポルトガル語）を対象とした待遇表現と命令文の研究（規範文法と言語の実態。社会言語学的アプローチ）（3）ブラジル口承文芸、Literatura de Cordelの研究と紹介（4）「出稼ぎ現象」の社会言語学的諸相（国立国語研究所のプロジェクトの一環として、人の移動に伴う母語の変容について借用語からアプローチ）（5）小説に現れる外国語、借用語の研究（言語学と文学を関連させる試み）のようになります。今回の講演では（4）について少し述べたいと思います。

1990年の入管法改正に伴い、日系を中心とする多くのブラジル人がいわゆる「出稼ぎ」として日本の地域社会に流入することとなりました。このことは「デカセギ現象」などと呼ばれ、日本社会に様々な問題を提起しました。ポルトガル語を専攻する立場からはブラジルの言語であるポルトガル語への関心が高まったことは「デカセギ現象」がもたらした副産物でした。多くのポルトガル語話者の流入に伴い、当時の国立国語研究所日本語研究センターから現在（当時）の社会状況を考慮にいたした日本語とポルトガル語の対照研究的プロジェクトを実施

して欲しいとの依頼を受けました。私個人としては、20世紀前半の合衆国へのポルトガル移民（主としてアゾレス諸島出身者）の母語保持や母語変容についての先駆的研究である Pap, Leo, Portuguese-American Speech: An outline of speech conditions among Portuguese Immigrants in New England and elsewhere in the United States. King's Crown Press, New York, 1949 に目を通していたこともあり、在日ブラジル人たちの母語（ポルトガル語）が日本語との接触でどのように変容しつつあるのかという問題に興味を持っておりました。また1980年代までには当時の『言語生活』などの雑誌に、在ブラジルの日本人や日本からブラジルの大学に客員教授として招聘された日本語・日本文学専攻の研究者による「ブラジルの日本語」「コロニア語」などの報告・論考が掲載されていました。そこで私は1990年代の日本社会に居住するブラジル人の母語の実態を調査し記録しなければならないと考えました。しかしながら、授業やその他の事情から大学を長期間留守にして現地調査を行う選択肢がありませんでしたので、妥協策として、当時発行されていた在日ブラジル人向けのポルトガル語新聞の記事を資料として、次のような枠組みで調査を実施しました。(1) どのような日本語の語彙が日本で在日ブラジル人たちが用いるポルトガル語に借用されているのか。(2) 借用語を動的にとらえ、単なる「引用」から「一時的借用」、「定着度の低い借用語」「定着度の高い借用語」と4段階に分類し、その定着度を測定する方法を考案する。(3) 借用語が借用先の言語に定着する過程についての仮説を提出する。(4) 借用は決して一方向だけでなく(量の多寡は別にして)、日本語からポルトガル語への借用だけでなく、ポルトガル語から(1990年代の)日本語への借用の例を調査する。

調査結果を簡潔にまとめてみますと、次のようになります。(1) 現代の(ブラジルの)ポルトガル語に従来から見られた日本語からの借用語(例:sushi, sashimi, shoyu, sakê, judo, quimono, nissei, sansei, yonsei, caqui, poncã, origami, karaokê, shiitake, sukiyaki, chawan-mushi, nigiri, robata, teppan, yaki-soba)に比べて、1990年入管法改正後の「デカセギ現象」に付随して見られる借用語(例:yakin, hirukin, kyukei, zangyo, arubaito, teiji, shachô, obentô, kensa, pachinko, snack, genba, takyubin【夜勤、昼勤、休憩、残業、アルバイト、定時、社長、お弁当、検査、パチンコ、スナック、現場、宅急便】)には日本の製造業の現場で働く人々の生活環境から借用された語が多いことが判明した。(2) 定着度の高い借用語(語の意味を同格やカッコ書きなどの手段を使って説明していない。ポルトガル語の正書法の影響を受け、ポルトガル語の複数標識の-Sが付く。ブラジルの辞書の記載がある、など)は少なく、大半は、当時(1990年代)、定着度の低い借用語であった。(3) 語彙の借用は双方向に行われていた。当時のサッカー雑誌やブラジル料理のレストランなどの宣伝パンフレットなどを調査すると次のようなポルトガル語が現代日本語に借用(当時、定着度はまだ低いものと思われた)されていることが判明した。(例:セレソン、カピトン、ボランチ、マリーシア、シュラスコ、フェジョンファリーニャ、フェジョアーダ、コービ(couve)、ロディージオ、ピングア、カシャッサ、ポンジケイジョ)

これらの調査を行ってからすでに20年以上が経過しました。在日ブラジル人をめぐる状況もまた変化しました。新しい社会状況の下、また言語面でも新しい現象が見られるかもしれません。後進の研究者に大いに期待したいと思います。

(大阪大学名誉教授・ポルトガル語学)

最優秀卒業論文に「酒本真理子賞」を授与

天理大学アメリカス学会では、去る3月22日の卒業式当日に恒例の「酒本真理子賞」を地域文化学科アメリカス研究コースと外国語学科英米語専攻において選出された最優秀論文執筆者に授与した。授与式は、卒業式式典直後に開かれた上記各コース教員・卒業生が参列したクラス会の席上挙行され、以下の受賞者2人にそれぞれ賞状と図書カード2万円分の副賞が手渡された。

この「酒本真理子賞」は、1990年3月に旧天理大学外国語学部英米学科を卒業し、1年後に志し半ばにして白血病で亡くなった酒本真理子さんの名前を冠して創設された賞である。彼女の父親の酒本昌彦氏から、「後輩の育成とアメリカス学会の出版活動に役立っていただきたい」と毎年寄付を頂戴しているが、その一部を「酒本真理子賞」として毎年卒業式当日に授与している。

地域文化学科アメリカス研究コース：澤井とも子
『『ピルグリム・ファーザーズ』とその社会的意義—アメリカ社会の精神的基盤—』

外国語学科英米語専攻：山田彩華

“The Effective Methods of Grammatical Instruction of Presentation and Feedback in Communicative Language Teaching: Considering the Views of Students” [英語論文]

(「コミュニケーション・ランゲージ・ティーチングにおける文法指導の提示と修正フィードバックの有効的な指導方法—生徒の見解からの考察—」)

アメリカス学会の活動

◇定例研究会：7月11日（土）開催予定

恒例の天理大学アメリカス学会の2015年度定例研究会は、7月11日（土）午後2時から天理大学研究棟3階の第2会議室にて開催します。研究発表予定者および発表タイトル（仮題）は以下の通り。大野直樹氏（天理大学国際学部非常勤講師）：「ベトナム戦争期のアメリカのインテリジェンス関連」。松村光治氏（天理教海外部翻訳課員）：「パラグアイ日系社会の現在」。

◇第19回年次大会を昨年11月29日に開催

恒例の第19回天理大学アメリカス学会年次大会は、昨年11月29日に天理大学研究棟第1会

議室で開催され、千葉大学名誉教授の村山元英氏が、「ユダヤ系アメリカ経営者の起源とその進化について」と題して、また大阪大学名誉教授の河野彰氏が、「人の移動とことばの移動—借用語について考える—」と題して、それぞれ記念講演を行った。記念講演の要旨は、このニューズレター7～9頁を参照。

◇単行本『アメリカスのまなざし—再魔術化する観光—』を刊行

アメリカス学会では、昨年11月29日に開催した第19回天理大学アメリカス学会年次大会を記念して、単行本兼学会誌『アメリカス研究』第19号の『アメリカスのまなざし—再魔術化する観光—』を発刊した。

新入会員：野中モニカ氏（2015年4月入会）

編集後記

☆天理大学アメリカス学会の2015年会計年度は、昨年11月29日に開催の年次大会当日にスタートしました。2015年度の年会費（一般会員：5,000円、賛助会員：1口30,000円）を未納の会員の皆様は、昨年12月にお届けした『アメリカス研究』第19号（『アメリカスのまなざし—再魔術化する観光—』）に同封しました郵便振込取扱票にて指定口座（下記参照）宛にお振り込みくださいますよう、よろしくお願い致します。郵便振込取扱票を紛失された方も下記の郵便振込口座番号宛てにお願いします。

口座番号：00900-5-70364

加入者名：天理大学アメリカス学会

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお寄せください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 72：2014年5月13日発行)

発行者：矢持善和

〒632-8510 天理市杉之内町1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/